立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２０１０年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 文学研究科 英米文学専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科・英米文学専攻・博士課程後期二年	岡本　広毅　印	
指導教員	所属･職名	氏　名	
	文学部英米文学専修教授	菊池　清明　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　[人文]　・　社会	**個人・共同の別**	[個人]　・　共同　名
研究課題名	中世イングランドにおけるナショナル・アイデンティティの研究－ロマンスと歴史－		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科・英文学専攻・二年	岡本　広毅	
研究期間	２０１０　年度		
研究経費	２００　千円		

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究では、イギリス中世英語・英文学におけるその言語的、文化的、そして政治的背景を踏まえた当時の文学作品や歴史書物の分析と解釈である。1066 年のノルマン征服以降、イングランドが徐々にそのアイデンティティの復権と再構築に乗り出した時期と考えられる 13－14 世紀に英語で記された年代記、ロマンス作品そしてアーサー王物語群に焦点を当て、その意義を考察する。特に中英語ロマンス *Havelok the Dane* や *Sir Gawain and the Green Knight* という一見虚構に満ちた作品の文化と歴史の刻印を読み解いていく。両者ともロンドンから離れた周縁地域を特定する描写が多く散りばめられ、その地域性が際立つ一方で、物語の構成や展開はイングランドという国の概念と密接に結びついている。この時代の国家のアイデンティティとはいかに定義されているのかという問題を、地方独自の発信という視点から読み解いていく。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔中世ロマンス　〕〔ナショナル･アイデンティティ　〕〔地域と国　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

中英語ロマンス *Havelok the Dane* の誕生と、イングランドのデーン人侵攻の歴史とは切り離せない関係にある。歴史的に見てもヴァイキングとの接触は、イングランド人としての自覚や結束を促す契機となったことはこれまで幾度となく指摘されてきた。本作品において、イングランド全体をまとめ上げようとするその意識が最も先鋭化した重要な場面に、逆にデーン人のアイデンティティを問う言説が潜んでいることは極めて意義深い。この場面には、否定的な含みを持つ “here” の「デーン人」という他者を追放・排除しようとするイングランド側の歴史が刻印されており、そうした動きに加担することのない詩人の冷静かつ批判的な眼差しが込められている。過去の歴史に対する深い洞察に基づき、こうしたイングランドのナショナリズムの高揚の場面を、詩人は巧妙に利用していると言えるだろう。このような物語進行の背景には、ヴァイキングの記録が常にイングランドの視点から綴られてきたという認識があるのではないかと推察される。大陸からヴァイキング襲来の惨劇を嘆いたアルクィンやアングロ・サクソン年代記編者、そしてその後の歴史家は、自国の不幸を憂い、侵略者の行いを糾弾する常にイングランド側からの一方向的な視点であった。そうした意識の下で、詩人はそのイングランド人が築き上げた歴史の真偽を聴衆に問い、別の見方を示唆しているのである。このように、イングランド人の感情を揺さぶり、国としての結束を高める場面を最も説得力の欠けた場面へと仕立て上げることで、当時高まりつつあったイングランドの排他的思想の綻びと欠陥を明らかにしようとする詩人の批判的な立場が見て取れる。

中英語作品の中でも「イングランドとデンマークの国と民族の融合」という極めて特異な結末により、本作品の意義は、これまでイングランドにおける「デーン人の正当化」であるとされてきた。しかし、本作品の本質を歴史的なヴァイキングの「デーン人の正当化」として一口に片づけ、結論付けることはできない。当時のイングランド性の勃興という政治的・文化的コンテクストから本作品を考えると、そこに中世を通して否定的に受容されてきたデーン人の表象が覆されるという本作品の極めて重要で、劇的な物語進行があることを見逃すことはできない。そこにイングランドの一元的な歴史観に対する反動と歴史的・社会的な批判の眼差しを読み取ることができ、そうした批判を克服してこそ本作品の、類似作品群には決して見出すことのできない融合的・共和的国家を希求する結末はより深い意味を帯びてくる。

14 世紀を代表するアーサー王ロマンス、*Sir Gawain and the Green Knight* は 1839 年にフレデリック・マデンによって初めて編纂され、それまで不幸にも研究の対象となるどころか、一般の人々の目にも触れることもなかった。この要因として、リチャード２世からヘンリー４世間の政治的動向が絡んでいると指摘される。1390 年代に、ロンドンの反勢力を忌避した晩年のリチャード２世は、チェッシャー地域への軍事的支援や深い愛着から、イングランド北西部に政治・文化の拠点を築こうと試みた。しかし、政局の転換がそれを許さず、のちのヘンリー４世として即位したヘンリー・ボリングブログは、南部の中央集権化を図り、リチャードの築いたチャッシャー地域の文化の根絶を掲げたのである。こうした作品自体の受容の側面を見ても、中心と周縁という地理的な問題が関与していることが理解できる。

作品の内部にそのような地理的、文化的相克が表されている。全てを打ち明けられたガウェインと、地方の領主であるベルシラックは和解したのであろうか。ポピュラー・ロマンスの *Green Knight* では、ベルシラックに相当する人物は、最後にガウェインとともにアーサー王宮廷へと向かう。しかし、本作品では、ガウェインはベルシラックの 2 度の誘いも断っている。この消極的なガウェインの振る舞いにも表れているように、その和解は表面的なもので、詩人はそこにさらなる分裂の危険性を示唆しているように思われる。ガウェインとベルシラックの間に交わされる言葉のやりとりの中から、両者の地域における空間的認識のズレを検討し、両者の真の和解を否定する要素を読み取ることが可能である。それは緑の騎士の三度目の首切りにより、ガウェインの鮮血が雪に染み込んだ後に、瞬時に身構えるガウェインに向かって緑の騎士が言葉を発する場面である。生きていることへの喜びとさらなる不安が混同するガウェインに向かって、突然緑の騎士は、一連のテストの意味を打ち明ける。緑の騎士はガウェインの勇敢さを称え、冷静になるように促し、“No mon here vnmanerly þe mysboden habbez”（誰もここではそなたを無作法に扱わなかったではないか）」とガウェインに確認する。ここで注目すべきは、緑の騎士が “here”（ここ）と場所を特定していることである。この “here” は空間的に首切りが行われた緑の礼拝堂を指していることは疑いない。しかしガウェインは圧倒的な違和感を覚えるはずである。なぜなら、彼はそこで、おぞましく非人道的な仕打ちを喰らいかけたのだから。つまり、ガウェインにとって「ここ」という場所は、まぎれもなく無作法な扱いを受けた空間に他ならない。ガウェインが緑の礼拝堂に到着し、“here”「ここ」と執拗なまでに繰り返し、悪魔の巣窟と見做していたことは、このベルシラックの発言の特異性を浮き彫りにする。しかし、ガウェインの中の「ここ」という空間認識は、緑の騎士のそれとは一致しない。緑の騎士はどこを意味して「ここ」と言ったのか。ここで読み取れることは、緑の騎士が意図した「ここ」が、ガウェインを礼儀正しく歓待した自分の居城を指していることである。そしてその意識のもとで緑の礼拝堂で「ここ」と述べていることから、地方の領主には礼拝堂も城の一部、もっと言えば、彼の治める領土の一部であるという強い認識が潜んでいるのである。

研究成果の概要　つづき

この点で、ガウェインは緑の騎士に対して、“ȝe be lorde of þe ȝonder londe”「あの土地を治める領主」であるあなたの名は何というのかと問いかけ、緑の騎士が “þis londe”「この土地」を治めるベルシラックであると対応していることは重要である。両者における“ȝonder”「あの」 “þis”「この」という指示代名詞は、緑の礼拝堂という場所に対する両者の意識のズレを浮き彫りにする。目の前の全身緑の殺人鬼が、あの高貴な主人であると判明し、ガウェインはそこから態度を改めたが、「悪魔の巣窟」と決めつけた緑の礼拝堂に対する意識までは修正していない。このように、ガウェインは依然としてその場所を地理的・文化的他者として捉えている一方で、ベルシラックは緑の礼拝堂を自分の領土の一部とし、独自の認識、価値観を保持している。

こうした文脈で考えると、二度にわたる誘いを断り、地域の空間的認識にズレを残したまま立ち去る両者の別れ方は、実に暗示的である。詩人は、本作品で二度用いる “enker-green”という「緑の風貌」を今一度ここで強調し、“Whiderwarde-so-euer he wolde”「彼の赴くままに、いずこへともなく立ち去った」と語る。しかし、緑の騎士のこの立ち去り方には違和感を覚える。 緑の騎士の正体がベルシラックであると判明し、彼の帰るべき居城も地理的に明らかであるのに、なぜ詩人はここでその超自然性を前景化するのか。これはガウェインのその地域への認識が反映されたものと解釈できよう。すなわち、ガウェインにとってその土地がいまだに実態がなく不明瞭で、アーサー王宮廷での「緑の騎士」のように捉えどころのない存在であることが仄めかされているのである。これまで見てきた両者の空間に対する認識にはズレがあったが、その認識の落差ゆえに、ガウェインが滞在したこの地域は、依然として「曖昧模糊とした空間」であるという別れ方を詩人は選択したのである。このような詩人の語り口は、ガウェインとベルシラックの真の和解がなかったことを示している。その後、アーサー王宮廷に戻ったガウェインを待っていたのは、必死に自分の罪を告白するガウェインとは裏腹に、それを一笑に付し、緑の腰帯を “the renoun of the Rounde Table”「円卓の栄誉」として肯定的に祭り上げる楽観的な宮廷人の姿である。ガウェインが自らの戒めとしてその持ち帰った緑の腰帯の意義が、アーサー王宮廷人にとって都合よく解釈される様子は、ちょうどガウェインが旅を通して「他者像を歪曲した過程」をそのまま繰り返していると言えるだろう。このような一連の結末部分に、歩み寄る北部と、しかし依然としてそれを真に理解できない南部という構図を見出すことが可能である。

このような本作品独自の「アーサー王宮廷」と、ガウェインの訪れる「ブリテン島周縁地域」の構図、関係性を見ると、本作品の冒頭と末尾を飾るトロイの物語が一層象徴的な意味合いを帯びる。本作品の冒頭の一節は、ギリシャ軍の包囲を逃れたトロイの英雄らが、自国を去り、ヨーロッパの国々を建設するという、中世を通して重要な概念であった「帝国の移動」“translatio imperii”という主題である。 政治権力がトロイからギリシャ、そしてローマから西ヨーロッパへと移行していくこのトポスが本作品の冒頭に表わされている。従来、*Winner and Waster* や *Alliterative Morte Arthure* にもこのトロイへの言及が見られることから、この冒頭句は単なる伝統的な表現形式の一つにすぎないとして長らく看過される傾向にあった。しかし、トロイの陥落・崩壊を起源とするこの「帝国の移動」という視点は、今見てきたように、この後のガウェインの旅に通底する重要な主題である。トロイからブリテン島へ向かうこの「中心から周縁」への移動は、その後のガウェインの旅に陰影と深みを与える。トロイのアエネーアスが西方諸国を、6 行目、“depreced prouinces”（諸国を征服する、蹂躙する）のに対し、ガウェインのイングランド北西部の冒険は、アエネーアスと同様、未知との遭遇でありながらも、向かった先の地域性、他者性から常に不安に苛まれるものであった。つまり、ガウェインの旅路は、アエネーアスの開拓的、侵略的様相とは対照的に映るのである。

トロイやギリシャ、そしてローマという古代の文明都市にとって、ブリテン島は世界の最果てに位置する辺境の地であった。しかし、本作品はそのブリテン島のアイデンティティに深い関連性が見出せる。ガウェインがヨーロッパの周縁であったブリテン島の「さらなる奥地」へと向かうところに、この本作品の意義がある。「トロイの滅亡」によってヨーロッパの「中心」が「周縁」のブリテン島に推移していくように、詩人もアーサー王国という「中心」よりもガウェインの向かう「周縁地域」に力点を移している。本作品において、物語の冒頭を飾るトロイとブリテン島建国史話は、その後のガウェインの冒険を髣髴させる「中心と周縁」の関係により明確な意味合いを与え、さらにはブリテン島周縁地域がもつ固有の文化的・歴史的諸相、そしてブリテン島に内在するアイデンティティの複合性を浮かび上がらせるという、限りなく重要な役割を担っていると結論付けることができる。

同時代のこのような文脈から、ジェフリー・チョーサーの *The Reeve's Tale* における北部像の特異性も指摘することができた。特徴的な方言を操る北部出身の学生と、それを巡礼者に披露するノーフォーク出身の荘園管理人との密かな対応関係を見ることで、南部を脅かす北部の表象を考察した。

※　この（様式２）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（Ａ４縦型横書き１枚・自由様式）を添付すること。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

① 雑誌論文

・Hiroki Okamoto, ‘fantoum’ or ‘fayryȝe’: Interpretation of the Other in *Sir Gawain and the Green Knight*. 『立教レヴュー』40, 2011.

・岡本広毅 “trusteth wel, I am a southren man”:チョーサーと「荘園管理人の話」におけるイングランド北部、『英米文学』71, 2011.

④ その他

・日本英文学会第 82 回大会 岡本広毅 *Havelok the Dane* に見る「デーン人」論―デーン人からの脱却と変容―

・日本中世英語英文学会東支部第 26 回研究発表会、シンポジウム *Sir Gawain and the Green Knight* を読む―新たな発信に向けて （Locality, Marginality, そして Centrality から読む *Sir Gawain and the Green Knight* 岡本広毅）

・立教大学英米文学会、“trusteth wel, I am a southren man”: チョーサーと「荘園管理人の話」におけるイングランド北部